

## 問1

自然再生は、生態系サービス\*の保全・推進に有効であると考えられている。生態系サービスに関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

※) 人類が自然から得られる恵みのこと。

1. 生態系サービスの価値を検討するために、生態系サービスの計量化を行う試みがなされている。
2. 生態系サービスには、気候調整機能や生物多様性の維持等、経済的な価値の算出が難しい機能が多く含まれている。
3. 材木や薬草等生物資源の供給等は、経済的な価値が明確なため、生態系サービスには含めないのが一般的である。
4. 自然の中でのレクリエーションやエコツーリズム等には、産業が成立するレベルでの経済的な価値があり、自然が存在しないと実現しないものであるため、生態系サービスに含まれる。

## 問2

都市域における自然再生に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 都市域は、産業・生活等のために極度に人工化された空間であり、自然再生の対象とすることは極めて困難である。そのため、ごく小規模なトンボ池等、自然とのふれあい空間の創出を目標とすることが現実的で望ましい。
2. 都市域で自然再生を進めるうえでは、残存する断片的な自然地や半自然地をつなぐために緑地を創出したり、かつて生育していた生物相を文献等から明らかにして、それを段階的に回復させたりするなど、「都市の自然の成り立ち」を読み解きながら計画することが望ましい。
3. 都市域において自然再生を進めるためには、カラス等の都市型生物の繁殖や数多くの外来種が、対象地での生態系の健全な回復を妨げる要因となり得る。しかし、都市型生物や外来種も一旦定着した以上は「自然な」存在であるから、これを積極的に排除することは避け、推移を見守るべきである。
4. 日本の大都市のほとんどは沖積低地や海岸に立地している。しかし、これらの場所の生態系はすでに徹底的に破壊されているため、低層湿原や干潟等の生態系を再生するよりも、人工地盤上に樹林を創出する自然再生がより現実的である。

## 問3

植物の葉や茎や根、動物の排泄物、油粕、骨粉等の有機物を堆積あるいは混合し発酵させた堆肥の効果や特徴に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 植物の葉や茎や根等の植物を原料とした堆肥には、炭素ばかりでなくカリウムも含まれ、土壤に施用することで炭素循環がみられる。
2. 動物の排泄物を混入した堆肥には、植物を主原料とした堆肥よりも一般的に高い濃度のリン酸が含まれる。
3. 有機物の発酵途中段階のものを土壤に施用した場合には、土壤中で発酵熱が発生するが、植物を枯死させるような悪影響はない。
4. 堆肥が完成する過程では、アンモニア態窒素から亜硝酸態窒素、そして硝酸態窒素に変化することが認められ、この有機肥料から植物が吸収する硝酸態窒素を確保することができる。

## 問4

日本における自然再生の計画論や技術水準は、世界的にみて進んでいると言われており、近年のグローバル化により、今後はこれらの計画論や技術を外国で活用することが期待される。一方で、海外の自然再生の事例が日本に応用できることもあるため、日本の技術者にも国際コミュニケーション力としての英語力が求められるようになりつつある。

次に示す自然再生に関連する英語と日本語の対訳のうち、不適切なものはどれか。

1. conservation - 保全
2. preservation - 保存
3. vegetation - 植生
4. plantation - 植栽

## 問5

エコロジカルネットワークにおいて、飛翔性あるいは四足歩行性の動物に対し、地上徘徊性の小動物である両生・爬虫類は移動障害を受けやすく、保全・復元の計画目標生物としての指標性は高いと考えられる。それらの両生・爬虫類に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。ただし、種構成の大きく異なる亜熱帯域を除く本州・四国・九州・北海道を想定すること。

1. 小型サンショウウオ類やモリアオガエル・ヤマアカガエル等の樹林性両生類は、繁殖水域と樹林環境の連続性という視点で指標性に優れている。
2. ヘビ類には、致死性の毒を持つ種も複数いるため、ヘビ類を計画目標生物に含めてはならない。
3. カメ類には、在来種イシガメ以外にも外来種のミシシッピーアカミミガメや、江戸中期に移入されたと考えられるクサガメもいるため、計画目標生物にカメ類を用いる際は、在来種以外の取扱いに留意する必要がある。
4. トカゲ類は、街中の比較的小さな緑地でも生息可能であり、都市域における計画目標生物として効果的である。

## 問6

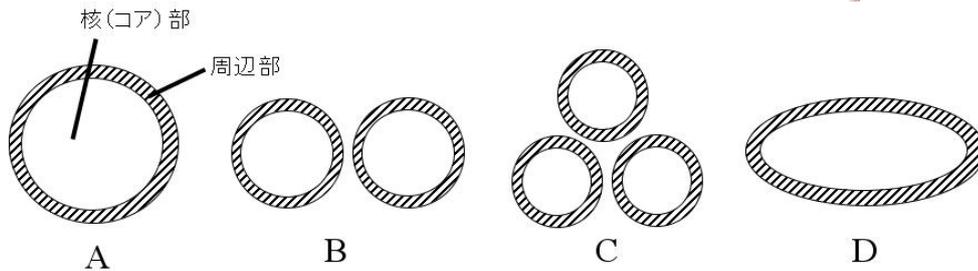
自然再生には、能動的再生と受動的再生という2つの考え方がある。これら2つの考え方に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 能動的再生は、生態系の再生プロセスに積極的に人間が関与しながら自然再生を進める方法であり、地形造成や土壌改良等により植栽基盤を整備し、植物を植栽するといったように、一連の措置が組み合わされて実行される。
2. 受動的再生は、一定の環境条件の整備は人間が行うが、後は生態系が自律的に再生するのを待つ方法であり、例えば、地形造成だけを行い、植生の成立は遷移に委ねるのは、受動的再生にあたる。
3. 受動的再生は、目標生態系への到達に長い時間がかかるが、生態系の自然な形成という面からは望ましい。ただし、費用面では工期が長引くため膨大になるという欠点がある。
4. 能動的再生と受動的再生はあくまでも考え方の整理であり、個々の現場でどちらか一方だけを選択しなければならないという性質のものではなく、状況に応じて両方を組み合わせて適用する柔軟な考え方が求められる。

## 問7

次の図A～Dは、同じ面積を持つ緑地を示し、斜線で示した外周は、周縁部としての一定の幅（たとえば10m）の林縁であり、それより内側は緑地のコア（核）部である。コア部の植生に多様性はなく均質であるが、形や分かれ方が異なっている。

A～Dに関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。



1. 生物の種数はAで最も多くなる。
2. コア部は、周縁部に比べて周囲からの影響を受けにくい。コア部を最も広く確保しているのはBである。
3. 緑地の面積に対して周縁部の占める割合が最も大きいのはCである。
4. Diamond (1975) が提示した5原則において、生息地をよりよい状態で残すのはDである。

## 問8

以下に示す文章は、自然再生等の事業を実施するうえで理解しておくべき法令に関する記述であるが、この記述に該当する法令として、最も適切なものはどれか。

・土地の投機的な取引及び地価の高騰が国民生活に対して及ぼす弊害を除去するとともに、乱開発の未然防止と遊休地の有効利用の促進を通じて、総合的かつ計画的な国土利用を図ることを目的としている。

1. 国土形成計画法
2. 農業振興地域の整備に関する法律
3. 国土利用計画法
4. 自然環境保全法

## 問9

自然再生等の事業における基盤造成では、地域固有の植物の埋土種子を含む開発予定地の表土を採取し、土地の造成後、緑化に活用することが望ましい。森林表土の利用に関する次の記述うち、不適切なものはどれか。

1. 一般に草本植物の埋土種子の寿命は、木本植物の埋土種子の寿命よりも長い。
2. 表土の埋土種子の多くは、表土の採取後1年程度で発芽しなくなる。
3. 表土に含まれる埋土種子は、種ごとに発芽時期が異なるので、目標とする植生によっては表土の採取時期が限定される。
4. 採取する表土が厚く（深く）なるほど、埋土種子の密度は低くなる。

## 問10

地域の湿地生態系の自然再生計画に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 注目される生物種が生育・生息していないため池であっても、自然再生等の事業を行う意義がある。
2. 近隣のため池や河川は、水路で連結してネットワーク化することで、水質や水温を均一に近づけ、水量の変動を一定に保つことが望ましい。
3. 落葉落枝や陸生小動物の死骸の水域への流入は、水質悪化の要因となるので、できるだけ回避すべきである。
4. 河川の水生生物であるカゲロウ類やカワゲラ類の環境指標性は、十分に把握されているので、これらを人為的に導入して、その後のモニタリングに活用することが推奨されている。

## 問11

樹林地や草地の自然再生を計画する際の、鳥類への配慮すべき特性に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 草地・疎林性鳥類の代表であるホオジロは、草地群落だけが分布する環境を特に好む。
2. 河原を繁殖地とするコチドリは、ヒナが草陰に隠れるため、密度の高い草地で覆われた河原が必要である。
3. コゲラ等のキツツキ類は、樹木の幹や太枝に入り込む昆虫類を食物としており、樹林地の管理においては、健全木ばかりではなく、衰弱木の存在も意味がある。
4. ウグイスは、樹林内の中層以上の場所にお椀型の巣を掛けて繁殖する。そのため下層の低木類や灌木類の藪状の空間は重要ではない。

## 問12

近年、昭和期に行われた拡大造林で大規模に整備された針葉樹の一斉人工林の一部を、かつての薪炭林のような広葉樹林に再生する試みが各地で始まっている。針葉樹の一斉人工林を、広葉樹林化あるいは針広混交林化する際の技術に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 針葉樹の一斉人工林では、表土のシードバンクの多様性が低下しているため、皆伐した林分の広葉樹林化に際しては、目標植生に応じた樹種の播種か植栽のいずれかの対応が不可欠になる。
2. 皆伐した針葉樹の一斉人工林に広葉樹の苗を植栽しても、野生動物に被食されて枯死する割合が非常に大きくなるので、周辺からの種子の飛来等を誘導、待機し、自然の遷移に委ねる方が広葉樹林へと早く誘導できる。
3. 皆伐を行うと、地表面の環境条件が急激に変化することで、それまでの強い被圧状態から開放される。そのため、多様性の高いシードソースが近くにあれば、播種や植樹をしなくても低茎草原の段階から植生遷移を緩やかに再生できる場合が多く、植樹をするのは遷移を早めるための行為である。
4. 皆伐を行うと、地表面の環境条件が急激に変化することで、それまでの強い被圧状態からは開放される。しかし、多様性の高いシードソースが近くにあっても、ササ類やシダ類で覆われてしまうことで植生遷移が進まないことがあるので、注意が必要である。

## 問13

ある場所で植生の維持・保全あるいは復元・再生を行う場合に、目標植生を成立させるための初期の植栽とその後の植生管理が必要である。植栽や管理に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 播種あるいは苗や株といった植物個体の植栽以外にも、土壌中の埋土種子や根・地下茎等を活用する方法として表土移植がある。
2. 地域性種苗を用意するには、地域内で種子を採種して実生を育成する以外にも、地域に自生する植物の小枝等からの挿し木による栄養繁殖も有効である。
3. 二次草地の維持方法として野焼きがあるが、その際、熱により土壌中の種子のほとんどが死滅するので、雑草防除の視点からも効果的である。
4. 雑木林の林内照度を上げるための管理として、間伐・除伐による樹木の密度管理や低木層にまで繁茂したササ類の刈り払いなどがある。

## 問14

自然再生に用いる植物材料等に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 自然再生では、地域の生態系を再生するために、在来種を用いることが重要である。しかし、現実には在来種の種苗を入手することが困難な場合が多いので、同一種であれば海外産の種苗を用いることもやむをえない。
2. 自然再生に用いる植物は、原則として外来種を用いることは避けなければならない。ただし、この場合の外来種とは海外から渡来した国外外来種のみを指し、日本国内の他の地域に生育している国内外来種は使用しても差し支えない。
3. 森林表土を撒き出して、埋土種子を発芽させる緑化工法を用いると、遷移後期に出現する木本植物（樹木）の多くが発芽して森林植生の再生が可能となる。
4. 自然再生に用いる地域性種苗を育成する場合には、各植物種について自然再生対象地域の近隣地に自生する複数個体から種子を採取して繁殖させることが望ましい。

## 問15

水辺の生物の生息環境や施工に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 河川において、上流域の生物の生息に適した BOD の上限値は、下流域に生息する生物の上限値よりも小さい。
2. 鉄分を多く含む湧水では、鉄細菌が水中の酸素と鉄分を吸収して増殖し、水底に橙褐色のドロドロとした沈殿物となって堆積する。
3. 小型のサンショウウオやアカガエル類の産卵に悪影響を与えないための施工の適期は、10月から2月までである。
4. 夜間照明は生物に対して負の影響を及ぼすことが多いが、ゲンジボタルでは黄色より長い波長であれば影響が軽減される。

## 問16

管理計画のうち、以下に示す作業項目A～Cと作業内容（ア）～（ウ）について、最も適切な組み合わせはどれか。

## 【作業項目】

- A. 育成管理
- B. 施設管理
- C. 運営管理

## 【作業内容】

- (ア) 参加型プログラムの提供等、利用者サービスを充実したものとするように管理を行う。
- (イ) 生物の生息環境を構成する施設や設備を点検し、必要に応じて修繕を行う。
- (ウ) 目標とする生物が定着し始めるまでの期間は、積極的に生育・生息の阻害要因の緩和や除去に努める。

- |    | A   | B   | C   |
|----|-----|-----|-----|
| 1. | (ア) | (イ) | (ウ) |
| 2. | (イ) | (ウ) | (ア) |
| 3. | (ウ) | (ア) | (イ) |
| 4. | (ウ) | (イ) | (ア) |

## 問17

植物に共生し、生育を促進させる菌根に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

- 1. 菌根の活動は土壌の肥沃化によって活発化する。
- 2. 菌根は裸子植物には共生しない。
- 3. 菌根は大気中の窒素ガスをアンモニアに変換する。
- 4. 菌根は植物の根を病原菌から保護することがある。

## 問18

公園の雑木林の林縁部に、キバナアキギリの種子が供給され実生が生育するようになったが、作業員が草刈作業の際に誤って刈り取ってしまうことが繰り返された。そのため、丸太を並べて、草刈の機械が入れないようにしたところ、ようやくキバナアキギリの実生を保護することができた。

その結果、雑木林の下層部にキバナアキギリが繁茂し、複層構造の美しい樹林景観を形成するようになった。

以下のうち、この公園の管理者にとって、この景観を維持していくための運営方法として最も適切なものはどれか。

1. 現場の作業員に植生管理の内容を説明するが、管理に直接関わりがない一般利用者には特に周知する必要はない。
2. 丸太を並べることで作業上の保護対策はとられているので、特に作業員には植生管理の内容を説明する必要はない。
3. 現場の作業員に植生管理の内容を説明すると共に、現地に植物特性と生育環境を維持する植生管理の内容を記した解説サインを設置し、利用者へ広く周知する。
4. 維持管理やメンテナンスに費用がかかるので、現地に解説標識等を設置する必要はない。

## 問19

西日本において、小規模な疎林や鎮守の森が残存する市街地の近くに、安定した照葉樹林を目標とする自然再生を実施した。次のうち、そこでの出現が予想される昆虫の定着順序として、最も適切なものはどれか。

1. クマゼミ → アオスジアゲハ → コカブトムシ → クチキコオロギ
2. アオスジアゲハ → コカブトムシ → クチキコオロギ → クマゼミ
3. アオスジアゲハ → コカブトムシ → クマゼミ → クチキコオロギ
4. アオスジアゲハ → クマゼミ → クチキコオロギ → コカブトムシ

## 問20

塩風や海水の影響を受ける海岸・沿岸地域に生育する塩生植物の特徴に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 塩生植物は、吸収した塩分を葉の塩類腺から体外に排出する機能や、体内の細胞液に塩分を蓄積し、塩分濃度の高い条件下でも適応、生育する特徴を持つ。
2. 塩生植物は、枝、葉、花、果実等の部位を構成する細胞の浸透圧を調整する機能を持ち、これは塩生植物以外の植物にはみられない特徴である。
3. 塩生植物は、多量の塩分を吸収した葉を落葉させることで体外に塩分を排出する機能や、葉の気孔から塩分を排出する機能を持つ。
4. 塩生植物は、軽度の塩ストレス下でも成長する特徴があり、海水の2～3倍の高濃度になると成長量が著しく低下するものの、枯死することなく生命を維持する。

## 問21

陸域生態系は、海からの日常的あるいは非日常的に様々な作用を受けており、これらの作用が陸域生態系成立の重要なメカニズムとなっている場合も多い。海から受ける様々な作用に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 沿岸生態系に著しい被害をもたらす津波は、自然的な攪乱として捉えることができ、生態系の更新等に作用するものである。
2. 河口付近では、潮の干満により海水と淡水が混じる汽水域や塩生湿地といった独特の環境が生じ易く、そのような環境への生育・生息に特化した生物種も少なくない。
3. 砂浜は、山からの土砂供給と沿岸流による砂の堆積により形成されるため、海浜植生の保全には、河川を通じた流砂現象を健全なものにする視点も重要となる。
4. 潮風や海水の飛沫の影響を受けやすい沿岸部では、各地で海岸林と呼ばれる独特の樹林帯が成立するが、砂浜域に多く発達するクロマツ林は潮に強く、自然植生として理に適っている。

## 問22

次の表は、タイプの異なる3つの草地A区、B区、C区において、3種類の直翅類の個体数を調べた結果を整理したものである。この表の内容を説明する(ア)～(エ)の記述のうち、正しい記号の組み合わせとして最も適切なものはどれか。

直翅類	草地		
	A区	B区	C区
スズムシ	0	0	2
オンブバッタ	1	3	2
トノサマバッタ	4	1	0

- (ア) 出現した直翅類の種類数はA区=B区=C区である。
- (イ) 「種類数が多く、そして各種の個体数が均等であるほど多様度指数が高い」とするならば、多様性はA区<B区<C区である。
- (ウ) 生息する環境(草地のタイプ)をその種の生態的地位(ニッチ)とすれば、その幅の広さは、オンブバッタ>トノサマバッタ>スズムシである。
- (エ) 出現した個体数の総数はオンブバッタ>トノサマバッタ>スズムシである。

1. (ア) と (ウ)
2. (ア) と (イ) と (ウ)
3. (ア) と (ウ) と (エ)
4. (ア) と (イ) と (ウ) と (エ)

## 問23

林野庁の保護林制度に定義される森林に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 「森林生物遺伝資源保存林」とは、森林と一体となって自然生態系を構成する生物の遺伝資源を森林生態系内に保存し、将来の利用可能性に資することを目的するものである。
2. 「植物群落保護林」とは、わが国または地域の自然を代表するものとして保護を必要とする植物群落及び歴史的、学術的価値等を有する個体の維持を図り、併せて森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資することを目的するものである。
3. 「特定動物生息地保護林」とは、特定の動物の繁殖地、生息地等の保護を図り、併せて学術研究等に資することを目的するものである。
4. 「特定地理等保護林」とは、地域における象徴としての意義を有する等により、森林の現状の維持について地元市町村の強い要請のある森林を保護し、併せて地域の振興に資することを目的するものである。

## 問24

生態的に安定した樹林地での落葉・落枝の量や堆積量に関する次の記述のうち、最も適切なものはどれか。

1. 冷温帯の森林では、暖温帯の森林と比較して、落葉・落枝量が少なく、林床の落葉・落枝堆積量も少ない場合が多い。
2. 暖温帯の森林では、冷温帯の森林と比較して、落葉・落枝量が多いが、林床の落葉・落枝堆積量は少ない場合が多い。
3. 斜面上部の湿潤な環境下では、斜面上部の乾燥した環境下と比較して、落葉・落枝量が少ないが、林床の落葉・落枝堆積量が多い場合が多い。
4. 斜面上部の乾燥した環境下では、斜面下部の湿潤な環境下と比較して、落葉・落枝量が少なく、林床の落葉・落枝堆積量も少ない場合が多い。

## 問25

以下の（ア）～（エ）に示す文章は、野外観察の結果を記したものである。この結果から読み取れる記述のうち、不適切なものはどれか。

- （ア） 1月頃、小型の蛾で筒状の蓑を持つツツミノガ属の一種の幼虫（以下ツツミノガと略記する）が、カワラノギクの花に現れてその果（いわゆる種子）を食害していた。
- （イ） カワラノギクの局地的な個体数は出水や植生遷移によって大幅に変動した。ツツミノガの密度はカワラノギクの個体数が急減した後に急増することはなかった。
- （ウ） 一度カワラノギクが絶滅した地点に、人工的にカワラノギクの個体群を造成した場合に、ツツミノガが生息する場合があった。
- （エ） 湿った重い積雪の際に、ツツミノガが結実した頭花からみられなくなることがあったが、翌年のツツミノガの密度に変化はなかった。
1. ツツミノガはカワラノギクを生産者と考えた時、一次消費者である。カワラノギクの絶滅は、ツツミノガの絶滅を引き起こす。
  2. カワラノギクの個体数の増減に応じてカワラノギクを食害するツツミノガは増減する。
  3. ツツミノガにはカワラノギク以外に食害する植物が存在する可能性がある。
  4. ツツミノガは一度地表に落下しても結実した頭花に登ることができる。

## 問26

農地に隣接する樹林や草地等の自然地の管理手法や機能に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 天敵昆虫（捕食者および捕食寄生者）は、植食者である農業害虫よりも一般に化学合成薬剤への耐性が低いため、農薬が施用されない隣接する樹林や草地では、天敵昆虫の避難場所や発生場所として意義が高い。
2. 農業害虫が薬剤への抵抗性を持つことを抑制するためには、隣接する樹林や草地で薬剤への感受性の高い害虫が発生することを許容し、これらの害虫が農地で抵抗性を持った害虫と交尾する機会を増やすという方法がある。
3. 樹林や草地等の自然地で発生する昆虫には、隣接する農地に移動して増殖することで害虫化するものがあるため、農作物生産上使用が推奨されない強力な殺虫効果のある薬剤を積極的に利用することで、農業害虫になる可能性のある種を根絶することが重要である。
4. 耕作地では、刈り払いや収穫が一斉になされ、生息環境を失った昆虫が別の耕作地に移動、集中して害虫となることがあるが、隣接する樹林や草地等の自然地はこうした昆虫の生息場所になるため、農地における昆虫の突発多発生を低減する場所として意義が高い。

## 問27

以下に示す文章は、植物の生育に関する記述であるが、文中の 、 に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものはどれか。

- ・ 野外において、同一の植物が競争のない環境に単植された場合と、他の種との競争のある環境に混植された場合とでは、それぞれに最適な環境が異なり、かけ離れた環境となることが多い。競争のない環境下に植えられた植物にとって、最も好ましい環境を  最適域と言ひ、競争のある環境下に植えられた植物にとって、最も好ましい環境を  最適域と言う。

- |    | <input type="text" value="a"/> | <input type="text" value="b"/> |
|----|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. | 生理的                            | 生態的                            |
| 2. | 生態的                            | 生理的                            |
| 3. | 生育的                            | 植栽的                            |
| 4. | 植栽的                            | 生育的                            |

## 問28

1992年にリオデジャネイロ（ブラジル）で開催された国連環境開発会議（地球サミット）において、「生物の多様性に関する条約（生物多様性条約）」が採択された。この条約は、生物の多様性を3つのレベルで捉え、生物多様性の保全、その構成要素の持続可能な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正な配分を目的としている。

上記に示す3つのレベルの組み合わせとして、最も適切なものはどれか。

1. 地域、生態系、種
2. 遺伝子、生態系、種
3. 生活型、生態系、繁殖方法
4. 遺伝子、個体、種

## 問29

自然再生等の事業を進めるうえで遵守すべき原則に関する次の記述のうち、不適切なものはどれか。

1. 自然再生等の事業で種の再導入を行う際には、その土地固有の系統を用いるべきである。
2. 自然再生等の事業では、短期間で大規模な事業を行うよりも、長期にわたり小規模な事業を継続する方が好ましい結果を生む場合もあるため、生態系の回復を妨げている要因を科学的に見極め、適正な規模の事業を行うべきである。
3. 自然再生等の事業では、様々な分野の研究者が参画すると価値観や見解の相違から意見が対立する場合があるため、生態学をはじめとする生物学の諸分野の研究者の協力にとどめるべきである。
4. 自然再生等の事業の目標を設定するにあたっては、どの程度の費用をかければ目標が達成できるかについて、費用対効果という観点から検討し、事業費に関する合意形成をはかる必要がある。

## 問30

以下に示す文章は、野生生物の保護・管理に関する法律の内容に関する記述であるが、この法律の名称として、最も適切なものはどれか。

・この法律では、国際希少野生動植物種について、販売・頒布目的の陳列と、譲渡し等を原則として禁止している。また、国内希少野生動植物種については、販売・頒布目的の陳列と、譲渡し等の禁止、捕獲等の禁止、生息地等保護区の指定、保護増殖事業計画等について規定されている。

1. 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）
2. 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）
3. 特定外来生物による生態系等に関わる被害の防止に関する法律（外来生物法）
4. 遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（カルタヘナ法）

平成 25 年度 自然再生士資格試験 択一問題解答

問題番号	解答	問題番号	解答	問題番号	解答
問 1	3	問 11	3	問 21	4
問 2	2	問 12	4	問 22	4
問 3	3	問 13	3	問 23	4
問 4	4	問 14	4	問 24	2
問 5	2	問 15	3	問 25	1
問 6	3	問 16	4	問 26	3
問 7	3	問 17	4	問 27	1
問 8	3	問 18	3	問 28	2
問 9	2	問 19	4	問 29	3
問 10	1	問 20	2	問 30	1